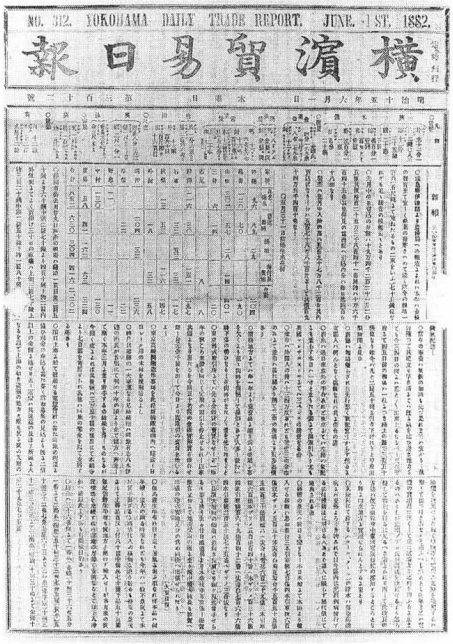

NO. 312. YOKOHAMA DAILY TRADE REPORT. JUNE. 1ST. 1882.
横濱貿易日報

開港のひろば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地　〒231　電話(045)201-2100
発　行　日/平成3年2月6日
印　　刷/(有)三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第020055号　類別・分類C-BE160

『横浜の新聞と雑誌』展特集

『横浜貿易日報』の発見

当館では、幕末から大正期を中心に、横浜及び日本に関係のある内外の新聞・雑誌を開館以来収集してきたが、この度、目録を発行し、展示で紹介するはこびとなった。ここでは、その整理の過程で新たに見つかった新聞を紹介しようと思う。

日本最初の日本語日刊紙として有名な『横浜毎日新聞』が、明治十二年に東京へ移り『東京横浜毎日新聞』になった後、明治十年代、横浜で発行された新聞はほとんどなかった。しかし、緑区にお住まいの小島幸康氏が所蔵される古文書の中から、今回『横浜貿易日報』がみつかった。

この新聞に関して、『横浜市史稿風俗篇』(昭和七年)は、明治十年六月九日付『大阪日報』の次の記事をのせている。「福原允君の編輯さるゝ横浜貿易日報の第一・第二号昨日到着せしが、貿易に関する内外の雑報等記載しありて、実に商人に缺くべからざるものと思はる。」そして、「紙面の体裁は、両面刷りで、現代の新聞から見れば其の全紙の四分の一の大さで、価格は不明であったが、上掲、大阪日報の記事に依っても、貿易港である横浜としての小新聞ながらの其内容は、可成り豊富有意義なものであったので、相当の読者を集めたのみならず、地方にまでも遞送されたものと思はれる」としている。また、福原允については、『明治新聞雑誌関係者略伝』(宮武外骨、西田長寿著　みすず書房　一九八五年)に、「明治一〇年創刊の『横浜貿易日報』に持主兼印刷長と署名、同年七月第七号に至っている。」という記載がある。日刊というよりも、週刊のように思われる。ところで、『明治十七年神奈川県統計書』を見ると、「新聞紙及雑誌発行高」の項目に、「貿易日報は十四年五月十九日に起リ、十五年十一月十一日廃刊。定価一号ヨリ十号マデハ一銭、十一号ヨリ二銭」(句読点筆者)とあり、発行高は、明治十四年が四九三九〇、明治十五年は四九九七八となっている。

さて、見つかった『横浜貿易日報』を検討してみよう。発行年月日は、明治十五年六月一日、第三百十二号である。そして、横浜商法会議所統計局精査・同編輯局編纂・同活版局印刷で、編輯人は奥信忠になっている。横浜商法会議所は、実業家の集会所を設け、時々会合を開いて相互の交際を厚くし、すすんで商業上の利害得失を討議研究して公益を増進する目的で、明治十年、原善三郎、小野光景、茂木惣兵衛を発起人として発足した。この新聞は、横浜商法会議所の機関紙のようなものだったと思われる。前記の福原允との関係は不明である。共衆社から発売されており、価格は一枚二銭であった。紙面は四面だてで、雑報と海外商況、横浜諸相場など主に経済記事により構成されるという、貿易港横浜にふさわしい新聞であった。

その創刊日であるが、『明治十七年神奈川県統計書』にあるように明治十四年五月十九日に創刊されたとして計算すると、休刊を考慮に入れれば明治十五年六月一日に三百十二号になってもおかしくはない。少なくとも明治十四年五月創刊は間違いないだろう。そうすると、『横浜市史稿風俗篇』や『明治新聞雑誌関係者略伝』にある『横浜貿易日報』は別の新聞のように思われる。その究明は、今後の課題としたい。

(上田由美)

座談

『横浜の新聞と雑誌』展に寄せて

二月六日からの横浜開港資料館企画展『横浜の新聞と雑誌』展にちなみ、国立歴史民俗博物館助教授の新井勝紘さんと日本獣医畜産大学講師の福井淳さんに自由民権期のジャーナリズムを中心にお話しをしていただきました。

――今回の展示に関連して当館所蔵の新聞・雑誌の目録を刊行いたしますが現在、当館の新聞・雑誌の所蔵点数は、新聞一三二タイトル、うち横浜発行のもの四七タイトル、雑誌二二六九タイトル、うち横浜発行のもの四六三タイトルに上っています。

横浜では、幕末・維新期に在留外国人による欧字新聞・雑誌が発行され、情報出版基地として重要な役割を持っていました。欧字新聞の影響を受けて、日本語によるはじめての日刊新聞『横浜毎日新聞』（『横毎』）が明治三年一二月八日に創刊されますが、一二年一一月一八日には東京に移り、紙名も『東京横浜毎日新聞』と改題されます。情報基地としての横浜の役割の変化が出てきているのか、『横毎』の東京移転の意味あいといった点からお話いただけますか。

福井　移転時に、その理由を説明する社説が書かれていて、そこで「地ノ利」論が展開されています。つまりこの時期、東京こそが政治・行政・経済の中心地であり、東京から七里離れた横浜は「へき地」として不便である。横浜では情報の遅れ、不足が生じ、「全国ノ主権」を握る記者の大任が果たせない。そこで、「地ノ利」を選んで、東京移転を行なったと言っています。

『横毎』は、東京に本社を持つ民権結社の嚶鳴社（おうめいしゃ）に買収され、機関紙となるので、東京に拠点を移さざるを得ないという側面はあったのですが、子安峻が『横毎』の発刊に尽力しながらも、明治七年東京で『読売新聞』を発行し、また仮名垣魯文が『横毎』の系統の『仮名読新聞』を発刊しつつも、一〇年には東京に移ることと併せて考えると、横浜の情報基地としての役割は、中央集権化の進行の中で急速に低下し、それが『横毎』の東京移転をも招いたといえるのではないでしょうか。

――移転前の発行部数は約一日八〇〇枚と言われており、『東京横浜毎日』になると、二五〇〇から多いときには五〇〇〇部と言われています。紙面も拡大し、記事量も圧倒的に多くなりますが、東京移転が部数の拡大につながったと言えるのでしょうか。

福井　肥塚龍が社説の中で、移転直後の明治一三年の発行部数は移転前の一二年に比し倍増し、さらに一四年には、早くも移転前の五倍増の発行部数になったと言っていますから、移転とそれに伴っての政論新聞としての充実が飛躍的に部数を伸ばしたと言えますね。

――『横毎』の発行部数は、全国的に見るとどの程度なのでしょうか。

福井　明治一〇年頃の東京の『郵便報知』『朝野』『東京日日』『東京曙』の四大政論新聞紙と比べると、わずか十分の一程度にすぎません。『仙台新聞』『新潟新聞』『愛知新聞』といった有力地方紙と、ほぼ同じ発行部数になります。東京移転後、先行紙に追いつくのも、明治二〇年代に入ってからです。しかし、明治八年頃から全国でも有数の政論新聞と目され、東京移転直後から四大政論新聞に加えて五大政論新聞の一つに数えられますから、部数以上に格の高い新聞であったことは見落とせません。

――新井さんは、多摩地区で民権家について調べられ、多くの資料を発掘されていますが、その中に明治一〇年代に多摩で発行された『武蔵野叢誌』という雑誌がありますね。

新井　『武蔵野叢誌』が発行された府中は、民権運動の拠点の一つであり、『武蔵野叢誌』は一種の民権派雑誌として、たびたび筆禍事件を起こし発行停止も繰り返しています。これを支えたのは、民権家たちであり、三多摩の民権活動家の意見発表の場を提供した雑誌と言っていいです。私の調べた民権派の家にはどこにも同誌がありましたから、広く定期購読されていたのでしょう。

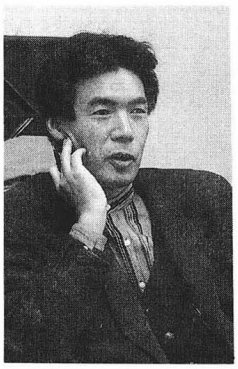
――そのほかに見つかった新聞・雑誌はありますか。

新井　多摩の民権家の家を調べると、ほとんどの家で新聞が残されています。『自由』をはじめ、『朝野』『郵便報知』『東京曙』『東京日日』もあるし、よくこんなに新聞を取っていたと思う程発見されています。また、ごく最近のことですが、北多摩の民権家の蔵から、『横毎』が東京へ移った二年後、明治一四年一二月に『横浜日日新聞』という新聞を発行することを呼び掛けた「創設告文」を見つけました。発起総代は横浜区の大森甫・藤山正誼の連名で、「自由権利の拡張」「民権の興起」を訴えたれっきとした新聞です。原紙が見つかったわけではないので果たして発行されたかどうか不明ですし、発起人の正体もわかりませんが、民権運動最盛期に横浜でこうした動きがあったことは、空白になっている横浜ジャーナリズム史の新事実として注目したいですね。

――昭和五六年に当館で「自由民権期の横浜」という展示を開催したときに、五日市の深沢家に残された『東京横浜毎日』社からの請求書を展示しましたが、深沢家は、新井さんたちが最初に調査されたのでしたね。

新井　ええ、二〇年以上前に調査しました。五日市には、深沢権八と内山安兵衛という二人の民権家がいますが、内山は東京に出ていき、中村正直の同

人社に学び、新聞を手に入れ、逐一五日市に送っていたようです。ともに後に自由党員となり、五日市を代表する民権家として活躍します。


新井勝紘氏

――横浜は震災と戦災を受けたため、市内中心部からは『横毎』や『横浜貿易新聞』の原紙はほとんど散逸し、見つかっていません。肝心の創刊号も群馬や、高山から発見されています。そこで当館では他機関が所蔵する新聞・雑誌をフィルムで入手し、紙焼き製本して閲覧に供しています。多摩地区では『横毎』や『貿易新聞』が発見されていますか。

新井　あまり意識して見ていないので、良く分かりませんが、民権家のお宅に『横毎』から日々の重要記事を抜き書きしたものがあり、おそらく回覧されていたのだと思います。

――『横毎』に集まった人々を福井さんは横浜系ジャーナリストと呼んでいらっしゃいますが、その系譜、人脈等について伺わせてください。

福井　「横浜系ジャーナリスト」とは、広義にとらえれば子安峻や三宅磐なども含みますが、少なくとも『横毎』とその人的・思想的流れをくむ『東京横浜毎日』『毎日』のジャーナリストたちを指していると考えてもらえばいいと思います。明治六年一〇月の新聞紙条目で、編集者名の記載が義務付けられてからの、『横毎』の編集長クラスを見ると、仮名垣魯文ついで島田三郎、そのあと塚原靖も編集を担当します。この人物は、渋柿園の名で明治二〇年代から大正期に歴史小説家として名を成した人で、沼津兵学校での島田の同窓生です。つぎに肥塚が一時期局長として入社し、一〇年末から東京移転までは、杉村濬が社を代表します。杉村は、後に外務省に入り明治二八年の閔妃殺害事件に関係します。ほかに何人かが編集者として、名を記していますが、経歴等良く分からない人がほとんどです。魚屋の子魯文、幕臣の子塚原・島田、農家の子肥塚、南部藩士杉村という出自になりますが、思想的にも民権派の島田・肥塚と政府寄りの杉村がいるなど、幅広い人たちを含んでいるのが移転前の横浜系ジャーナリストの特徴です。

――東京移転後はどうなのでしょうか。

福井　嚶鳴社の機関紙さらには改進党の機関紙の一つとなるので、沼間守一を中心として、島田、肥塚、草間時福、『栃木新聞』にも招かれ、田中正造の崇敬の的であった野村本之助、後に代議士になる青木匡、後に福井県知事となる波多野伝三郎など、嚶鳴社・改進党左派の優れた民権家が多数集まり、言論の中央センターとしての『東京横浜毎日』社の機能をさまざまに担っていきます。たとえば彼らの地方遊説活動は、民権思想普及に大きな功績を残しました。二〇年代の『毎日』は沼間の死後、島田を中心に社会改革路線をとり、島田に私淑するメンバーが集まります。例えば、初期社会主義者の横山源之助であり、三〇年代には木下尚江や小山東助が加わり、大正デモクラシーの地ならしをしていきます。このように長い視点で横浜系ジャーナリストを見てみると、大きな横浜系ジャーナリスト山脈とでもいうべきものを日本の言論界に築いたといえるのではないでしょうか。一般的に横浜のジャーナリストというと島田に代表されがちですが、その並びや裾野には、多彩なジャーナリストたちの峰々があります。

――ところで、明治二三年に『横浜貿易新聞』が発行された後、横浜では貿易関係の日刊紙が数紙発刊されます。政論新聞でなく、実業新聞であることが横浜の特徴と言えます。

福井　どういう新聞がありますか。

――『横浜貿易新聞夕報』『横浜商品日報』『横浜商事新報』『蚕糸商報』『生糸新報』などが続々と発刊されます。新聞紙に直接切手を貼って、そのまま郵便で送っています。

情報は早く伝わらないと意味がありませんが、新聞は東京、横浜からどれくらいの時間で多摩に届いたのでしょうか。

新井　それについては、興味深い資料があります。明治一五年に五日市で郵便路線復活の嘆願書が出されます。郵便の経路はあらかじめ決められていますが、当初東京、横浜からはまず八王子に入り、続いて五日市に入っていました。ところが、この年三月に八王子から、拝島に行き、青梅を回って五日市に来る路線に変わったのです。路線変更で、一日で届いた手紙が、二日から三日もかかるようになったそうです。そこで、元のルートに戻して欲しいという嘆願をしたのです。

――横浜からの情報にはどういうものがあったのですか。

新井　多摩地域は天領だったので、もともとは江戸に目が向いていましたが、開港以降養蚕が盛んになり、横浜とも「絹の道」で結ばれます。生糸商人も多数生まれ、彼らにとっては、横浜の生糸相場や海外の情報を得ることは、たいへん重要なことでした。

――経済的損失も出てくるのですね。

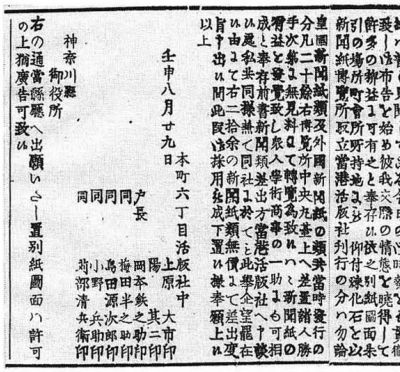
新井　生糸、お茶、織物、材木の四つの物産の情報がとくに重要で、「本地人民の命脈と申す」とまで書かれています。一六年一月までの約半年間の郵便の遅れによる損失は、およそ五万円にも上っていると記されています。

――当時は、鉄道もまだ開通していないので馬車で運んだのでしょうが一日で届くというのは早いですね。

新井　商業の中心地である五日市としては、三日もかかるというのは死活問題ということになりますね。それと、この運動には、民権家がこぞって参加し、郡をあげての大運動になります。それだけ彼らにとって、情報はできるだけ早く知りたかったのでしょう。ま

た、明治一五年というのは、民権運動が最も盛んな時期でもありましたから。

――新聞はどのようなところで読まれていたのでしょうか。明治初年代、町場には売捌人という人がいて、チリンチリンと鈴を鳴らして売り歩き、瓦版の読み売り販売方法がとられていたようです。その後各地に、諸新聞を縦覧できる場所が置かれてゆきます。従来横浜の縦覧所に関しては、明治五年九月の『郵便報知新聞』で、横浜市中有志の縦覧所設置計画が紹介されてきました。幸いに、今回明治五年八月二九日の『横毎』にそれに該当する記事をみつけました。同日付けで、小野兵助・苅部清兵衛ら戸長より、神奈川県に出された願書です。町会所所持地に新聞紙博覧所を設け、活版社の協力のもと、『横毎』をはじめ二〇余紙を無料で供したいというものですが、実際に設置


以書付奉願上
皇國新聞紙類及外國新聞紙類共當時發行分凡二十餘紙右博覽所中央九畳の上へ差置諸人勝手次第見聞致し候樣轉覽為致度尤無料にて一般入覧致し度奉願上候
壬申八月廿九日　本町六丁目活版社中
神奈川縣御役所
戸長　大市印　同　同　同

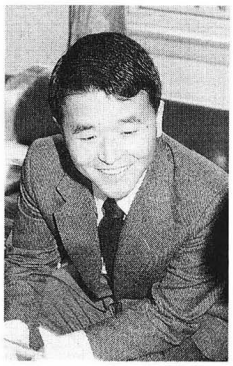
新井　地域の仲間がふざけてあだ名をつけたり、ゴシップもあり、他愛のない小さな情報が書かれています。

――書き手はどういう人なのですか。

新井　専従の人もいて、「うやむや社」などと名付けていますが、中央からやってきた記者ということでなく、地域の人たちが出しています。形だけは大新聞の真似をしていますがね。

――今のミニコミ紙のようなものですね。ところで、新聞記者の給料など、生活面はどうだったのでしょうか。

福井　魯文の弟子の野崎左文によると、明治初年の小新聞の記者の給料は月に一〇円台から四〇円台、編集長クラスで五〇から六〇円程度だそうです。当時の生活水準からみても、最低クラスの記者はかなり薄給の部類でしょう。また、この頃はつぶれる新聞も珍しくありませんから、生活も不安定ですし、肥塚も「終身ノ憂アッテ一朝ノ楽ナシ」と不安を訴えています。その意味で官界へ転身していく者もかなりいました。


福井淳氏

――官界からの誘いもあったのですか。

福井　この時期、民権派の転向を誘うためもあり、民権派出身者をとくに厚遇していたようで、官界に転身した人の昇進のペースは早かったようです。転向とはいえませんが、島田三郎の場合でも、『横毎』の編集長から元老院大書記生に登用されたときの月俸は七〇円でしたが、五年後には文部権大書記官として二〇〇円というたいへんな高給になっています。社会の木鐸としての使命感に燃えてはいても、経済的にも社会的地位としても官界の魅力は断ちがたかったといえるでしょう。

――新聞記者が官界への登竜門のようになっていたことはないですか。

福井　それは、おっしゃる通りで、官界からの働きかけをあてにして、後ろ盾のない非藩閥や旧幕臣の子弟が新聞界に入って、そこでの名声を足場にして上昇して行こうという意識は濃厚でした。杉村濬などはその典型であったといってもよいと思います。

――貴重なお話をいただきましたが、今後のジャーナリズム研究の課題・展望についてはどうお考えですか。

新井　民権派ジャーナリストという言葉は最近、定着してきていますが、これまで名前の上がった人たちの個別研究はほとんどありません。地域の民権家がジャーナリストを呼ぶことがどういう意味を持つのか、すなわち改進党系のAでなく、自由党系のBを呼んだのはなぜかというように、個別のジャーナリストがそれぞれ演説した地域でどういう影を落としたのか、彼らが地域とどうネットワークを作っていったのかということを知る上でも個別研究を進めることは重要です。

福井　私も同感です。横浜系ジャーナリストの研究も、今後一層、個々に思想的にも行動的にもその豊かさを汲み取らなければなりませんね。島田の研究は最近ようやく盛んになりましたが、横浜にとっては、併せて肥塚の研究が重要になると考えています。島田が官界に出ている民権運動高揚期に代理をつとめ、民権派ジャーナリストの政党結成などを企図したのは肥塚でした。また、大同団結期にも、外遊に出た島田に代わって、肥塚が板垣たち旧自由党と困難な折衝を行なっています。肥塚の全体像はまだよくわかっていませんが、常に島田の補佐・代理人であったことは確かです。島田の活動は、実はそうした肥塚に支えられているところが大きかったのです。

新井　新聞の投書欄には注目すべきものがあります。生活のレベルの様々なものがあり、当時の状況をつかむのに、大変有益です。文明開化反対という意見もあったり、当時の文明開化路線にたいして、読者がどうリアクションを起こしているかなどが良く分かります。また、新聞の研究といった面では、海外に移住した日本人が発行した、日系新聞の研究も最近手が付けられ始めています。海外に渡った人たちは、苦しい生活を始めるにあたり、まず新聞を出します。地域社会をつくるための根幹となるところに新聞があり、大きな役割を果たしています。明治初期、そして民権期の新聞の流れがこの日系新聞にまで及んでいるという感じが強くします。

福井　もう一つ、民権期の新聞・雑誌がもっと発掘されて欠号が埋められ、さらに整理が進められてよいのではないでしょうか。整理というのは、目録などが作成されたりすることですが、その点でいうと、今回の横浜開港資料館の「新聞・雑誌目録」の刊行や、新しい資料が展示に出されるというのは、現在の研究状況の欠落を埋めたり、大きなインパクトを与えるものだと言えますね。

――今日は雑誌にまで話が及びませんでしたが、重要な研究対象ですね。明時一〇年代から二〇年代に地域でいろいろな雑誌が出されるのは、新聞よりも規模が小さく、作り手も余り金をかけずに作れたからです。狭い範囲のコミニュケーションをとる同人誌程度のものであってもバックナンバーが揃い、研究が進めば新聞よりももっと深い歴史像が描かれるのではないでしょうか。新聞・雑誌は近代社会の政治、経済、社会、風俗いろいろな分野での基本的な資料なのですが、これまであまり重要性が認識されていませんでした。欠号を埋め、整理を進めていくことは私ども横浜開港資料館の大きな仕事の一つと考えています。今回の所蔵目録の刊行が今後の研究のスタートになれば幸いです。

本日は長時間、ありがとうございました。

（十二月十七日横浜開港資料館にて。聞き手は館員の上田由美、吉良芳恵、佐藤孝があたりました。）

資料よもやまばなし

三代目 沢村田之助の写真

展示が好評を博するのもさることながら、これを機会にさまざまな方とお付き合いが始まり、新しい資料と出会ったり、新事実を発見したりできることほど嬉しいことはない。「横浜の芝居」展の開催にあたっては、早稲田大学の演劇科や演劇博物館の方々に、企画の段階からすっかりお世話になった。そこから輪が広がり、昨年末の十二月二十一日には、歌舞伎俳優として第一線で活躍中の六代目沢村田之助氏が来館され、曾祖父にあたる三代目田之助の写真について、新しい知見がもたらされた。演劇博物館の松山薫氏からも、種々ご教示を得たので報告しておこう。

「横浜の芝居」展見学に来訪された六代目沢村田之助氏

三代目田之助は、幕末期の天才的な名女形として名高い。慶応四年五月、前年横浜で宣教医ヘボンから、難病脱疽の治療のため、右足切断手術を受けたことに対するお礼興行として、大一座を引きつれて来浜、義足で下田座の舞台に立ち、大喝采を浴びた。横浜の演劇史の夜明けを告げる出来事であった。

写真①は、通説に従い、三代目の写真として展示したもの、②③は六代目から提供を受けたものである。②は手札判の鶏卵紙焼付写真で、台紙裏に「田之助」の墨書があり、『国性爺姿写真鏡』彦惣女房古今、明治五年一月村山座」という六代目のメモが添えられている。松山氏のご教示によると、『演劇界』増刊「百人の歌舞伎俳優」（昭和三十年七月）に、同じ写真が同様の解説付で掲載されている。引退を決意し、「一世一代名残狂言」を演じた時のものに違いない。

③は昭和初期の複写、裏に万年筆で「沢村田之助、八重垣姫ニ扮ス」と書かれ、「左手及び両足切断後」という六代目のメモが添えられている。伊原敏郎『歌舞伎年表』によると、三代目は、明治三年十月、守田座で「本朝二十四孝」の八重垣姫を勤めているから、この時のものか。松山氏によると、演劇博物館の「沢村田之助」の分類のうちに、これと同じもの一枚と役名不明のもの二枚の手札判鶏卵紙焼付写真がある。また、先の「百人の歌舞伎俳優」および『劇に関する展覧会図録』（流行会主催、大正四年）に、芳幾の錦絵「俳優写真鏡・源之助姉里江・沢村田之助」のもとになった写真が掲載されている。

①は従来三代目の代表的な写真として諸書に掲載されてきたもので、演劇博物館には複写を含めて三枚収められており、そのうちの一枚には「三世沢村田之助」「高尾」の記入がある。しかし、六代目がおっしゃるように、上記計五枚の三代目の写真と比べてみると、顔の輪郭が違う。それが田之助として伝承されてきたことからすると、四代目の写真と考えざるをえない。はたして、「百人の歌舞伎俳優」に掲載されている四代目の写真と比べてみると、断定はできないにしても、確かに似ている。少なくとも、今後は、三代目の写真とすることは差し控えるべきであろう。

三代目田之助は、横浜の演劇史にとって恩人ともいうべき人物だが、そのわりには事実が正しく伝えられていない。その一端は、先に当館の刊行した『横浜もののはじめ考』一六七頁に記しておいた。例えば、従来ヘボンによる田之助の手術の様子を描いたものとされてきた「フランス之名医足病療治」という錦絵が、刊年からみてこの事件とは無関係なことなどである。また、慶応三年に右足、明治二年に左足の切断手術の行なわれたことは明らかなのに、伊藤保二著『開港時代文化伝来史話』以来左右が逆になり、横浜市図書館編『横浜もののはじめ』から、半沢正時著『横浜ことはじめ』にいたるまで、誤りが繰り返されている。いずれ、その事績について、できるだけ正確に紹介する機会を得たいと思う。

（斎藤多喜夫）

①従来三代目とされてきた写真。早稲田大学演劇博物館提供

②三代目の古今。六代目田之助氏提供

③三代目の八重垣姫。②に同じ

横浜新風土記稿 ⑬

横浜発行の新聞

―明治一〇年以降の変遷をおって―

新聞発行一覧

明治一二年一一月の『横浜毎日新聞』東京移転から、明治二三年二月の『横浜貿易新聞』発刊まで、横浜では久しく日刊新聞が発行されなかったというのが通説であった。

『横浜市史稿風俗編』（昭和七年）でも、明治十年以降の横浜の新聞について「帝都に接近して居る関係上からも、中央集権に禍ひされて、所謂郷土的大新聞としての活躍と其真価とは、甚だ及ばぬ恨みがある」との評価を下している。しかし、『横浜貿易日報』の発見により（一頁参照）、この通説はくつがえされた。約一年半しか発行されず、当時の政論新聞とは性格を異にする実業新聞ではあったが、横浜貿易商の機関紙的な意味を持つことを考えると、『横浜貿易新聞』の先駆として評価されてよいのではなかろうか。

ところで、明治二〇年代は政論新聞から商業新聞への転換期で、主に貿易や商況などを報じる『横浜貿易新聞』が発行されたことは、それに対応するものであった。その後横浜では実業新聞が花盛りとなり、商社や商店は、貿易・商況・商品為替相場などを掲載した新聞形態のものを発行し、各々得意先に送付した。

では、その実態はどのようなものだったのであろうか。そこで本稿では、明治一七年から大正五年までの『神奈川県統計書』から、横浜での新聞発行一覧（八・九頁）（ただし、今回は居留地等で発行の欧字新聞を除く）を作成してみた。ミニコミ的なものも含め、実に様々な新聞が横浜で発行されていたことがわかる。しかし、現在残念ながらその大部分の残存が確認されていない。

なお、『神奈川県統計書』の他にも、諸資料が横浜発行の新聞紙名を教えてくれるので、付記しておく。

その一つが、明治三五年一〇月刊行の『風俗画報』第二七五号「横浜名所図会」である。そこには、『横浜貿易新聞』『横浜新報』『京浜新聞』『横浜輸出入日報（英文）』『横浜商況日報』『横浜茶業商況』『生糸日報』『蚕糸日報』『商品日報』『取引所商報』『横浜商況新報』の諸新聞があげられている。

また、明治三六年四月に横浜新報社が発行した『横浜繁盛記』でも、『横浜新報』（無休刊、一ヶ月三〇銭）、『横浜貿易新聞』（日刊、一ヶ月三〇銭）、『京浜新聞』（日刊、一ヶ月一五銭）、『内外商事週報』（毎土曜日発行、一ヶ月一〇銭）、『美名登新聞』（無休夕刊、一ヶ月一五銭）を確認することができる。

横浜の新聞販売店

次に、新聞はどのような販売店で売られていたのか。

明治四年四月二〇日の『横浜毎日新聞』には、横浜の新聞売払所として、本町一丁目岸田銀次（吟香）・馬車道高砂町薬店出島松造・弁天通三丁目杉村屋貞七・同五丁目写真師下岡蓮杖が、同紙の同年五月一〇日号（『横浜市史稿風俗編』）では、岸田・出島・杉村屋の他に、野毛町薬店栗原清八郎・吉田福富町二丁目須原屋佐兵衛があげられている。

『横浜市史稿風俗編』はまた、明治初年代、弁天通四丁目の新聞取次業安藤政吉が評判になり、五代目尾上菊五郎の芝居にもなったこと、明治二〇年代の横浜には二大取次店として、太田町三丁目の万字屋と住吉町四丁目の角田屋があったことを教えてくれる。

明治一八年に鈴木新太郎が創業した、住吉町四丁目五七番地の日の出屋新聞店も、全国新聞の大取次所として名を知られていた。配達部数も二万余といわれ、本店の他に、野毛町第一・平沼町第二・神奈川宮洲町第三出張店が置かれた。（『横浜成功名誉鑑』『横浜社会辞彙』）

しかし、右のような販売店以外はあまり明らかではない。そこで参考に、横浜における新聞販売店数の年次統計を『神奈川県統計書』から作成した。

第1表　新聞雑誌販売店数

年度	横浜市内	県内総数
明治18	15	19
19	13	17
20	12	17
21	11	20
22	8	26
23	7	29
24	15	41
25	15	44
26	15	35
27	16	40
28	22	61
30	30	65
38	50	91
39	57	96
40	61	103
41	68	131
42	69	119
43	73	128
44	73	135
大正1	77	145

（注）『神奈川県統計書』（明治18～大正1）より作成。明治29、31～37年は統計が不明

明治三〇年代の横浜市内の新聞雑誌商の増加は、第一次市域拡張（明治三四年）によるというより、日露戦争後の読者層の拡大を意味すると思われるが、今後の調査を待ちたい。

おわりに

新聞発行一覧表に表われない新聞が一つある。明治三五年一〇月に発刊され、明治三七年四月に廃刊した『美名登新聞』である。今回『神奈川県統計書』を基礎に当館所蔵の新聞にあたりながら新聞発行一覧を作成してみて、次のようなことを痛感した。それは、従来横浜の新聞研究において利用されてきた諸資料があまり正確ではないということである。元より統計書が正確とは限らないが、原紙での確認が困難な以上、諸資料を補うためにも、一定程度の資料的価値をもつことは明らかである。この表は基礎的データに過ぎないが、正確さを増すためにも、原紙の発見、確認が急がれる。（吉良芳恵）

横浜における邦字新聞発行一覧（明治14年～大正5年）

新聞紙名	刊行日	発行場所	発行期間
横浜貿易日報	日刊		明治14.5.19～明治15.11.11
商況日報	日刊→(M24)毎週1回	山吹町	明治19.9.7～明治28
横浜貿易新報	日刊		明治20.6.4許可、明治20年のみ発行
横浜輸出入日報	日刊		明治20.12.8許可～明治23
欧文横浜輸出入日報	日刊	本町	明治20.12.8許可～明治28
横浜商業日報	日刊		明治20.12.17許可、明治20年のみ発行
横浜貿易輸出入調報	日刊	不老町→(T1)翁町2丁目71番地	明治21.1.21許可～明治28、大正1～5
欧文横浜貿易輸出入調報	日刊	(T1)翁町2丁目71番地	明治21.1.21許可～明治25、大正1～5
横浜貿易新聞→(M37.6.20)横浜新報→(M37.7.1)貿易新報→(M39.12.3)横浜貿易新報→	日刊→(M30)毎夕2回→(M31)日刊	〔東京→(M23.5.1)南仲通4丁目61番地→(M24)南仲通5丁目90番地→(M37.6.20)本町6丁目86番地〕	明治23.2.1～〔現在〕
横浜商況週報(甲)	毎週		明治24.9.16届出、明治24年のみ発行
横浜商況週報(乙)	毎週		明治24.9.16届出、明治24年のみ発行
蚕糸日報	日刊	南仲通	明治25.5.3届出～明治35
〔横浜商事新報〕	〔日刊〕	〔住吉町6丁目78番地、商報舎〕	〔明治25.5.20発行〕
商事新報	日刊		明治25.5届出～明治26
横浜蚕糸日報	日刊	南仲通3丁目	明治25.5届出～明治30
横浜商況新報	日刊	住吉町	明治27～明治28
横浜商事新報	日刊	住吉町	明治27～明治28
横浜米穀商況日報	日刊	南仲通	明治27～明治28
横浜取引所商況	日刊	〔南仲通5丁目90番地、横浜貿易新聞社〕	明治27～明治28
横浜商品日報	日刊〔夕刊〕	南仲通3丁目→(M30)本町〔南中舎〕	明治27～明治30
横浜取引所商報→(M31)取引所商報カ→(M35)取引所日報カ	日刊→(M30)毎日2回→(M31)日刊	本町6丁目〔82番地、横浜活版舎〕	明治27～明治35
京浜広告新報	日刊	本町	明治28
生糸新報	日刊	本町〔4丁目56番地、本町印刷所(横浜生糸合名会社)〕	明治28～明治31
横浜新報〔(注6)を参照〕	日刊→(M30)毎週1回→(M32)毎月2回→(M33)日刊	尾上町→(M30)松ヶ枝町→(M32)尾上町→(M33)太田町→(M35)本町	明治28～明治35
京浜新報	日刊	尾上町6丁目	明治29
横浜蚕糸新報	日曜休刊	本町4丁目	明治29
蚕糸要報	日刊	南仲通3丁目→(M30)太田町〔6丁目94番地〕	明治29～明治35
茶業商況→(M31)横浜茶業商況	毎月1回	元浜町→(M32)桜木町	明治30～明治32
蚕糸商報	日刊	本町〔6丁目82番地、横浜活版舎〕	明治31～明治35
商品日報	日刊	本町→(M32)南仲通〔4丁目〕	明治31～明治35
〔(M29.12.1)〕京浜新聞→(M37)横浜日報	日刊	初音町〔1丁目1番地〕→浪花町7番地〔京浜新聞社〕	明治31～明治39
生糸日報	日刊〔毎夕〕	弁天通3丁目49番地→(M44)南仲通4丁目68番地→(T3)弁天通3丁目49番地〔生糸日報社(原合名会社)〕	明治31～大正5
内外商事週報→(M36.9)毎朝新報→(M41.4.1)横浜毎朝新報→〔(S5.4.5)横浜毎日新報〕	毎月曜日→(M34)毎土曜日→(M36.9)日刊→〔(S5.4.5)夕刊〕	尾上町〔4丁目〕→〔(M33)本町6丁目→(M35.5)南仲通4丁目73番地〕→南仲通4丁目39番地	明治31.〔12〕～〔昭和6.8〕
横浜商況日報	日刊	太田町〔3丁目〕	明治32～明治35
商況新報→(M33)横浜商況新報カ	毎週2回→(M36)週刊→(M38)毎週2回→(M41)月3回→(M43)週3回	相生町〔5丁目〕→(M36)住吉町5丁目72番地→(M41)本町5丁目71番地→(M43)住吉町5丁目72番地	明治32.〔11〕～明治43
増田屋商報→(M44)京浜増田屋商報	毎月4回→(M36)月3回→(T3)毎週〔火金〕	本町4丁目86番地→(M41)本町4丁目68番地→(T1)本町4丁目86番地→(T3)本町4丁目64番地→(T5)本町4丁目68番地	明治33～大正5
横浜通信	日刊	太田町4丁目61番地→(M40)住吉町5丁目72番地→(M41)弁天通6丁目110番地→(M43)太田町5丁目89番地→(M44)南仲通4丁目73番地→(T3)太田町5丁目89番地	明治33～大正5
東洋商業新報	毎月3回	羽衣町	明治34
ニイト商報	毎月1回	若葉町	明治34～明治35
東洋通信	日刊	本町→(M35)南仲通	明治34～明治37
横浜タイムス	週刊	南仲通	明治36～明治37
横浜めさまし新聞	月3回〔3の日〕	長者町6丁目57番地→(T1)南吉田町892番地	明治36～明治41、大正1～大正5
京浜週報	毎週1回	花咲町5丁目73番地	明治40

新聞紙名	刊行日	発行場所	発行期間
横浜新聞	月3回→(T5)月2回	野毛町3丁目128番地→(T1)同上119番地〔横浜新聞社〕	明治40～大正5
神奈川新報	月3回	青木町9番地→(M43)同町3580番地	明治41.〔3〕～大正5
横神商業新報	月3回	本町6丁目82番地	明治42
横浜新報	日刊	吉田町1丁目13番地	明治42
寸鉄新聞→(M43) 寸鉄	月3回	英町2丁目14番地	明治42～明治44
横浜日報	日刊	南仲通4丁目68番地	明治42～明治44
横浜内外化粧品小間物商報→(M44)横浜内外化粧品小間物新報→(T3)横浜小間物化粧品商工新報→(T4)横浜小間物化粧品商報	月刊→(M44)月2回→(T1)月1回→(T3)月2回	浪花町6番地→(M44)南仲通4丁目68番地→(T1)浪花町6番地	明治42～大正5
蚕糸日報→(M44)横浜蚕糸日報カ	日刊	南仲通4丁目77番地	明治42～大正5
横浜衛生新報	月刊→(M44)月2回	日ノ出町2丁目46番地→(T2)南太田町2108	明治42～大正5
東洋医薬新報	月2回	南太田町2187番地	明治43
横浜毎日新聞	日刊	南吉田町	明治43
港栄新報	月3回	住吉町4丁目50番地	明治44
統一通信	月1回	本町5丁目71番地	明治44
横浜時事新報→(T1)実業時事新報	月3回	浅間町776番地	明治44～大正1
横浜商業新報→(T3)横浜商業新聞	月3回	南仲通4丁目68番地→太田町6丁目97番地	明治44～大正5
日本家畜新報	月1回	南吉田町165番地	大正1～大正2
横浜薬事新報	月2回	長者町4丁目43番地	大正1～大正2
商況日報	日刊	山田町1丁目14番地	大正1～大正4
精華新報	月1回	扇町4丁目147番地→(T3) 同上143番地	大正1～大正5
横浜内報社	隔日	北方町756番地	大正2
横浜民報	日刊	松ヶ枝町54番地	大正2～大正3
正義新聞	月2回	南吉田町625番地	大正3
東洋新報	月1回	西戸部町452番地	大正3
横浜家庭新聞	月1回	梅ヶ枝町16番地	大正3
横浜三五屋現物日報	日刊	本町2丁目24番地	大正3
蚕糸要報	日刊	弁天通2丁目30番地	大正3～大正4
佐藤株式店商報	日刊	南仲通2丁目26番地→(T5) 同上22番地	大正3～大正5
蚕糸貿易日報→(T5)蚕糸貿易新聞カ	日刊	弁天通1丁目20番地	大正3～大正5
中井株式日報	日刊	太田町4丁目75番地	大正3～大正5
羽二重週報	週刊	南仲通2丁目26番地	大正3～大正5
㊀現物日報	日刊	野毛町3丁目123番地	大正3～大正5
増田屋安部商報	月3回	南仲通3丁目50番地	大正3～大正5
横浜㊐株式日報	日刊	南仲通4丁目73番地	大正3～大正5
㊐現物月報	日刊	南仲通3丁目38番地	大正4
日米新報	月3回	初音町1丁目9番地	大正4～大正5
日本興信所通信	日刊	太田町5丁目85番地	大正4～大正5
横浜民友新聞	日刊→(T5)月刊	北方町756番地	大正4～大正5
柏現物日報	日刊	相生町3丁目50番地	大正5
㊅株式日報	日刊	南仲通3丁目37番地	大正5
四村商店日報	日刊	南仲通3丁目45番地	大正5
ジャパン通信	日刊	野毛町3丁目119番地	大正5
大五現物日報	日刊	野毛町1丁目31番地	大正5
斗トマス株式商報	日刊	弁天通4丁目72番地	大正5
横浜加賀屋日報	日刊	太田町4丁目69番地	大正5
横浜産業新報	月2回	花咲町5丁目67番地	大正5
横浜内外通信	日刊	港町5丁目25番地	大正5
横浜ポケット新報	月2回	長者町9丁目92番地	大正5

(注1)『神奈川県統計書』(明治17年～大正5年)中の〔新聞雑誌発行高〕より作成。ただし、同一紙名でも許可や届出の年月日が異なる場合は、別紙名として扱った。
(注2) 新聞紙名・刊行日・発行場所の変遷は、『神奈川県統計書』に表れたものであるから、実際の変遷とは異なることがある。そのため、『横浜開港五十年史』、『横浜成功名誉鑑』、『横浜社会辞彙』、『横浜市史稿風俗編』、その他当館が所蔵する諸新聞を参考にして〔　〕でこれを補い、できるだけ実態に近づけた。
(注3) 発行期間は、月日が明記されているものはそのまま、年しか記されていないものは年のみを記した。また、許可された年月日しか記されていないものは「～許可」、届出の年月日しか記されていないものは「～届出」と、表記した。なお、大正６年以後は統計がないため、大正6年以降発行されている新聞でも、発行期間は表記上「～大正5」とした。ただし、『横浜貿易新報』に限っては『神奈川新聞』として現在も発行されている関係上、「～現在」とした。
(注4) 欧字新聞は省略した。
(注5) Ｍは明治、Ｔは大正、Ｓは昭和を意味する。
(注6) この新聞の変遷は、後に『横浜貿易新聞』と合併する同一紙名『横浜新報』のものとは異なる。今後の調査課題としたい。

上海市学術交流代表団の訪問

一九九〇年十二月三日から十二日までの一〇日間、上海市の学術交流代表団が横浜市を訪れた。横浜市と上海市は一九八九年より、比較都市形成史研究の分野で学術交流を開始し、横浜側では当横浜開港資料館がこの事業を担当している。

今回の代表団は上海市档案館副館長林徳輝氏を団長とし、上海市档案館の馮紹霆・馬長林の両氏、上海社会科学院歴史研究所上海史研究室の鄭祖安氏、上海市人民政府外事弁公室の衛紅氏の五名であった。

当館会議室にて。左から馮、衛、林、鄭、馬の各氏。

横浜開港資料館と上海市との交流

上海市との交流は海外資料調査の一環として開始された。当館では横浜の歴史を東アジア全体の歴史展開の中でとらえることが必要であると考え、とりわけ十九世紀の中頃に開港された中国と日本の開港場の関連を重視してきた。一九八七年六月に第一回上海市資料調査、一九八八年十二月に第二回上海市資料調査を実施した（詳細は『開港のひろば』第二一号および『横浜開港資料館紀要』第七号を参照されたい）。その間に両市関係者の間で学術交流の機運が高まり、当館では横浜・上海都市形成史研究会（代表：横浜市立大学加藤祐三教授）を結成し、比較都市史研究をスタートさせた。

そして一九八九年十二月に、学術交流の初回として代表団が上海市を訪れ、上海市人民政府外事弁公室を表敬訪問し、上海市档案館、上海社会科学院歴史研究所、上海図書館で資料の調査・閲覧を行うとともに、学術交流の方針について担当者と意見を交換した。また、上海博物館へ表敬訪問を行った。

上海市代表団の活動

今回の上海市学術交流代表団の来浜の目的は大きく分けて二つあった。第一は上海市の研究者が横浜の史跡や文化施設を調査・見学し、横浜の歴史と現状への理解を深めることであった。第二は当館と共同で進めている学術交流の実施計画を協議することであった。

史跡調査では、外国人居留地の史跡調査に主眼がおかれた。まず、日米和親条約締結の地であり、旧英国領事館所在地であった当館から出発し、横浜公園、港の見える丘公園、山手外人墓地、山手八十番館遺跡、エリスマン邸、根岸森林公園（日競馬場）、中華会館（地蔵王廟）等の横浜居留地（関内・山手）関連の史跡を踏査した。また横浜港の洋上見学、新港埠頭の赤煉瓦倉庫など港湾設備の見学も行なった。

横浜山手の史跡調査

施設見学では、まず、当館の展示室、収蔵庫、閲覧室を見学した。日本の開国から居留地時代までの横浜の歩みをたどった常設展示はもとより、企画展示「横浜の芝居」にも強い関心を示され、またあわせて館蔵資料の調査も行われた。市内の関連機関として、金沢文庫、三渓園を見学し、東京では国立公文書館、東洋文庫、東京大学付属総合図書館を訪問した。それぞれの機関で温かい歓迎を受け、展示室・書庫等の施設の見学、資料の閲覧を行なった。

史跡調査・施設見学を進める一方で、当館調査研究員との座談会、横浜・上海都市形成史研究会との合同会議を開き、代表団の方々と学術交流の方向性、各機関の研究活動について情報を交換した。また、一行は横浜市役所に表敬訪問を行なった。

学術交流の展望

横浜と上海はともに開港場（居留地・租界）を基盤として発展してきた都市であると言える。その意味で二つの都市は類似した性格を有するが、一方では日本と中国との開国の状況・意味の違い、両国の国内状況の差異から著しく異なる性格も有している。そこで、当館の横浜・上海都市形成史研究においては、この二つの都市の歴史を「比較」と「関係」の観点からとらえる方法を探っている。「比較」によってそれぞれの都市の歴史の固有性が一層明らかになり、横浜と上海の二者間の「関係」、あるいは第三者を介しての横浜と上海との「関係」を追及することで、東アジア史の文脈の中で横浜の歴史をとらえることができればと考えている。

横浜・上海友好都市提携二十周年にあたる一九九三年には、当館と上海市関係機関との学術交流の成果を、企画展示・出版といった形で公表したいと考えている。

（伊藤泉美）

横浜人物小誌 ㉗

幕末・明治の横浜町名主

小野兵助

ここに紹介する小野兵助は、幕末から明治初年にかけて、横浜町の名主・副市長を歴任した人物である。しかし、現在、彼のことを知っている人は大変少なく、時代の流れの中で忘れ去られてしまった感のある人物である。もっとも、横浜の実業界を代表する小野光景の父親が兵助であると言えば、「ああ、あの人物か」と納得する方も多いかもしれない。つまり、兵助は幕末から明治初年の横浜町に多大の貢献をしながら、長男光景の影に隠れてしまった人物ということになる。そこで、ここでは彼の事蹟を紹介しながら、彼のひととなりを偲びたいと思う。

小野兵助は、文政元年（一八一八）三月一八日生まれ、信濃国伊那郡小野村（現在、長野県上伊那郡辰野町）出身の人物である。生家は小野村の旧家小沢家で、その後、同村の小野家の養子になったと伝えられる。彼が、横浜に移住したのは安政六年（一八五九）のことで、中年の域にさしかかった頃であった。横浜に移住した理由については、よく分かっていないが、移住直後から横浜町会所の役人に就任したようで、彼の墓碑には「安政六未六月、移横浜、為本町五丁目町役」と記されている。また、文久元年（一八六一）の『横浜武鑑』には町会所五丁目役人として兵助の名前が記され、開港直後から横浜町の町政に携わっていたことは間違いない。

さらに、その後、彼は横浜町名主に就任し、出来上がったばかりの市街地の町政確立に大きく貢献していくことになる。なお、町名主に就任した時期については二つの説があり、『横浜沿革誌』は文久元年九月と伝え、彼の墓碑では元治元年（一八六五）とある。また、この頃の彼の活動については不明な部分も多いが、彼の墓碑は慶応元年（一八六五）に太田町の名主を兼務し、同三年には「苗字」を許されるようになったと伝えている。さらに、この頃から彼の名主としての手腕が高く評価されるようになり、明治元年（一八六八）に新政府が複数の名主を廃し、新らたに名主一名を公選させた際に横浜町の名主に当選している。

その後、明治三年（一八七〇）には行政機構の改変によって名主の人数が五名に増員されるが、この時も彼は名主に任命され、本町・海辺通・北仲通・南仲通・弁天通・堺町・洲干町・弁財天町などの町政を担当している。また、明治四年（一八七一）には、各名主の分担地域の改変がおこなわれたが、彼は以前と同じ地域の町政に携わっている。さらに、同年一二月には、横浜町総年寄が市長、名主が副市長と改称され、彼も副市長と呼ばれるようになった。

このように、彼は、幕末から明治初年の横浜町政に一貫して携わり、市街地住民が神奈川県に提出する請願書・訴訟文書・届書などの取次、戸籍・土地台帳の管理、外国人と日本人との売買品の調査、捨子・盗難品・行倒人・水死人の取調べなど、多岐にわたる業務を行なっている。このため、新政府からも「苗字帯刀」を許されたほか、明治三年には窮民の救助に功があったとして神奈川県から金七百疋を下付されている。

しかし、こうした彼の活躍も、明治三年頃から病気のため、しだいに職務遂行が困難になり、明治五年（一八七二）十月には「退役願い」を神奈川県に提出し、職を辞し郷里に帰ることになる。現在、この時期に彼が記した「公務日記」が残っているが、この日記によれば、彼は明治三年二月一六日から四月一三日にかけて病床にあったようである。また、この時の病気はかなり重かったようで、「重症」のため医師の往診を頼んだ日もあった。幸いにも、この時は、なんとか回復したものの、日記には、その後も医師から薬を入手している様子が記されている。

このため、先に述べたように、彼は、明治五年十月に家督を長男の光景に譲り、郷里の小野村に帰ることになるのである。彼の辞職に対し、神奈川県は在職中の「職務出精」を賞し、一か月分の給与金三十両を下付し、彼の功績に報いている。

また、故郷に帰った兵助は、しだいに体調も回復し、その後は悠々自適の生涯を送ったと伝えられている。彼が、八三歳の天寿を全うしたのは、明治三三年（一九〇〇）七月二七日のことであったが、同年八月一九日の『横浜貿易新聞』は彼の死を伝えると同時に、小野家の業績を賞する記事を掲載している。

彼が、横浜で活躍した期間は、わずか十数年にすぎなかったが、横浜町政の基礎を築くと同時に、長男光景の活躍の基盤を作ったと評価することができよう。

なお、彼は名主在職中、詳細な「公務日記」を記しており、現在、明治三年一月から翌四年一二月にかけての日記が残っている（但し、明治三年五月二五日から同年九月六日までは欠けている）。この日記は、兵助の帰郷後、彼のご子孫にあたる小野忠秋氏（長野県辰野町）の家に伝存したが、今回、忠秋氏のご好意によって、当館から翻刻することになった。当館では、この日記の公開によって、明治初年の横浜町の町政や市街地の実態が明らかになるものと期待している。

（西川武臣）

閲覧室から

この度、新聞・雑誌の整理が終わり、『横浜開港資料館所蔵　新聞・雑誌目録（平成二年一二月末現在）』としてまとめることになりました。また、同時に展示を開催しています。今回は、展示中の雑誌の中から明治期に創刊された日本語雑誌を紹介したいと思います。展示している号以外は、近日中に閲覧室で公開する予定です。

○知玉叢誌

岩井市僊、伊藤松宇、森三溪が発起人となって結成された知玉学会発行の月刊誌。明治二〇年七月に創刊。発刊の趣意は、「学術の展覧会とも謂うできぃ業を企て、事の新古雅俗を論ぜず、投書を会員諸君に求め、其の寄稿を輯めて一の冊子となし、会員の人々に視さしめんとす」とある。知玉学会は、明治二四年一月に東京に移っている。

○千草叢誌

文友学会発行の月刊誌。発行兼編輯者は吉永良延。明治一〇年一〇月創刊。『知玉叢誌』と同種の雑誌。明治二二年七月一六日、出版条例にふれ発行禁止となった。以後「千草園」に続く。

○自治

横浜青年同志会発行の政治及び実業関係の雑誌。横浜青年同志会は、同会仮規約によれば、「広く横浜に於ける青年の結合を計り、従来の弊風を矯正し、各自の知識を交換し、進んで横浜市の安寧幸福を保護する」ことを目的として組織された。同誌は、明治二六年三月一四日創刊し、同年四月二七日には号を改め、「横浜評論」と改題した。

○横浜英語学校雑誌

横浜市住吉町一丁目九番地の横浜英語学校雑誌部発行の雑誌。

横浜英語学校は、「横浜港に適切須要成る英文会話の熟練を計る」目的で明治二五年四月に設立された。明治二六年八月二〇日発行の第一号「誌告」によれば、商務に従事していて、勉強する時間のない生徒のために、この雑誌を発行したとある。

○実業之横浜

「横浜唯一の実業雑誌」として、実業之横浜社より明治三八年七月創刊された。対外貿易の発展、商工業の振作、青年に対する社会教育の三点に照準を当てている。大正一四年八月より「大横浜」と改題、昭和一五年には「工業之横浜」と改題して、昭和一九年頃まで続いたという。

（上田由美）

資料館だより

行事開催予定（平成二年度）

▼展示

(1)『横浜の新聞と雑誌』　2／6～4／21

▼講座

(1)英文資料講読会　ブルーム著『一八七二年の横浜』を読む　講師徳岡孝夫（開講中）

(2)『横浜の新聞と雑誌』展関連講座　3／2から3／30の毎週土曜　全五回　講師等詳細未定

ミニ情報

▼寄贈資料

(1)歌川国松画挿絵版画等　八点（神戸市中央区　濱本博子氏）

(2)横浜市史稿内容見本　一点（町田市加山達夫氏）

(3)蔦座芝居番付　一点（緑区榎が丘青木久氏）

(4)盛進社持田製糸場賞状雛形　一〇点（泉区上飯田町　加藤豊吉氏）

(5)有喜世新聞等　二四点（南区南太田増田好夫氏）

▼出版物

(1)『横浜開港資料館所蔵　新聞・雑誌目録　平成二年一二月末現在』　予価一二〇〇円

(2)『イリュストラシオン』日本関係記事集　第三巻　予価二八〇〇円

(3)『横浜開港資料館所蔵　芝居番付目録』

(4)『横浜町会所日記　横浜町名主小野兵助の記録』　（いずれも近刊予定）

▼臨時休館と無料入館のお知らせ

○特別展準備のため、次の期間展示室・閲覧室とも休館いたします。

4／23・24及び5／28～5／31

○6／2は横浜開港記念日ですので、展示室への入館は、無料となります。

展示予定（平成三年度）

(1)『ケンペル展　ドイツ人の見た元禄時代』　4／25～5／26

ドイツ生まれの医師であり大旅行家であったケンペルは、長崎オランダ商館の医師として一六九〇年（元禄三年）に来日した。これはシーボルトの来日より一三〇年以上も前にあたる。ケンペルは二年余りの滞在中に江戸参府も経験し、厖大な記録や資料を持ち帰った。その著書『日本誌』は日本研究の名著として知られ、ヨーロッパの日本観に決定的な影響をおよぼした。

今回の展示は来日三百年を記念した巡回展で、大英博物館・大英図書館所蔵のケンペル自筆資料や彼の日本コレクションが初めて日本で公開されるとともに、ドイツ各地からも貴重な関係資料が出品される。ドイツ－日本研究所との共催。展示期間中に記念講演会を開催の予定（詳細未定）。

(2)開館十周年記念『資料が語る横浜の歩み』展　6／1～七月下旬

(3)『R・Hブラントンと横浜のまちづくり』展　八月上旬～一〇月下旬

(4)『維新期の英仏駐屯軍と横浜』展　一一月上旬～一月下旬